

・南恩納では、龕が現存する。戦後1954年に行われた龕づくりを見学した方から当時のお話を聞けた。区の議事録にも龕および龕屋に関する記載がある。この龕は現在、恩納村博物館に収蔵・展示されている。

・現在、恩納村営墓地団地を利用・管理しているのは、富着、前兼久、仲泊、宇加地、喜瀬武原、安富祖、太田、真栄田である。瀬良垣も計画中という。太田では、墓地団地について詳細な資料をいただいた。



墓地団地(富着、前兼久、仲泊)

他にも紹介したいことはありますが、文字数の関係もあり、もう一つだけ印象に残った仲泊のことを記して終わりとします。

仲泊では、お墓に立て置く弔旗の文字を今でも区長さんが書いておられるそうです。コロナが流行し始めマスクが中々入手できない時期は、個人のマスク作りにさらし布が使用されたため、中々弔旗に使う白布が調達できず、代わりに白紙を利用したとのコロナ禍ならではの逸話もあります。また同区では、葬式に供える紙花の作り方が伝承され、書記さんが作られます。さらに葬儀に使用する祭壇を区事務所で保管し、希望する区民には無料で貸し出し出しているとのこと。このような事例は他にもあるのかもと調べてみたいと思います。

戦後、火葬の普及や人口の流動化、職業の多様化という社会的変

容も相まって、沖縄の葬墓制は大きく変化しました。お墓の面からみると、家族単位の平地式家型墓の需要が増えて墓地の確保が必要になりました。この傾向は恩納村でも同様といえそうですが、今回の調査を通して、海岸沿いに古くからの墓所とホテル等観光施設が共存していることに気づきました。これは観光地として名高い恩納村の特徴ともいえます。

今回の調査は正味18日ではありますが、2022年10月から始まり、2023年8月までと約11か月にわたりました。コロナ禍をかいぐつての調査であり、お忙しい中時間を割いてくださった15区の区長さん、書記さん、区民の皆さま、そして恩納村史事務局職員には感謝の念でいっぱいです。本当にありがとうございました。本原稿についても追加訂正等がありましたら、村史編さん係までご連絡いただけますと助かります。

今回の調査では深掘りできなかったお墓の移動時の儀礼や同じ墓に入れる家族・親族の範囲等々、お聞きしたいことはまだまだあります。また調査に伺うことがあるかと思いますが、その時もお教授をよろしくお願いたします。この成果は、恩納村史「民俗編」での原稿という形でお返しできるよう頑張ります。

#### 【参考文献】

・『恩納村墓地整備基本計画』(平成17年 恩納村)

村史編さん係(恩納村博物館内)

☎982-5112